

田手川に生息するオヤニラミ

神埼支部 三田川小学校 教諭 龍智将

1. どんないきもの？

神埼郡吉野ヶ里町（旧東脊振村）を流れる田手川の水際には、無数のアシが繁茂している。これらのアシの根元付近にじっとしているのがオヤニラミである。

オヤニラミは、体長8～12cm、日本産ケツギョ科の純淡水魚で、本州西部から四国、九州西部から北部にかけての水草の繁茂する清流に生息する。（インターネットの情報によると、京都桂川・由良川を北限として、福岡県



今川、熊本県菊池川を南限とする地域に分布とされる。）体色は暗褐色から黄褐色を示し、環境や興奮によって体色を様々に変化させる。6本から8本の淡褐色の帯がある。エラ蓋にオヤニラミの特徴である暗緑色の班紋を有し、片面に2つの目があるようにも見える。興味ある習性としては、縄張り意識が大変強く、飼育する水槽の中でも、気に入った場所に侵入しようとする他の魚がいると、激しく威嚇して追い払う姿が見られる。また、オスが産み付けられた卵に、胸びれで新鮮な水を送り続け世話をする『子煩悩な様子』が観察できる。肉食で、水生昆虫・甲殻類、小型魚類などを補食する。飼育下で人に馴れやすく、特異な習性から観賞魚として人気がある。

近年、本来の生息地では個体数が減少しているのに加え、本来生息していない河川等での生息例が多数報告されるなど、国内移入種としての問題が顕在化しつつある。種としては遺存固有期にあたるものと考えられ、RDB（レッドデータブック）において、準絶滅危惧（NT）に指定されている。（佐賀県の「レッドデータブックさが<2001年度版>」では“絶滅危惧Ⅱ類種”とされており、個体数の減少している魚類であることには違いない。）

2. 生活の中で？

①「オヤニラミ」の呼び名について

・オヤニラミには、「カワメバル」「ヨツメ」「ミズクリ」「セイベエ」など多くの地方名があるが、九州では、「ヨツメ」「セイベエ」「セイジャババ」などと呼ばれているらしい。体の特徴や、習性がもとになっているものと思われる。

②「オヤニラミ」の生息する自然環境

・オヤニラミの減少の原因は、他の魚類の減少と同様に河川環境の変化である。水質の悪化、河川改修による水生植物の減少、餌となる水生昆虫や甲殻類の減少などである。佐賀県内でも生息する河川が限られてきている。

③身近な川にいる魚への興味、子どもたちの自然離れ

・子どもたちの生活から、川や池などの存在が遠ざかっている。危険防止や遊びの変化、生活様式の変化（川の水を直接使わなくなったこと）など様々な要因があるが、同時に河川に棲む生物への興味も失われつつある。比較的『田舎』の佐賀（良い意味で自然がたくさん残されているはずの）でさえ例外ではない。魚を手で捕まえたことのない子どもたちは実際はかなり多い。オヤニラミのようなユニークな魚の存在を知ることは、身近な河川の環境に関心を抱く良いきっかけになる。

④留意すべき点

・レッドデータブックにも記載されているとおりオヤニラミは“絶滅危惧種”である。あくまでも保護を主眼に、生息環境や種の個体数に配慮しながら捕獲・飼育する必要がある。また、本来の生息地域とは異なる個体の放流などは厳に避けるべきである。

3. 理科学習の中で？

(1) 単元 第5学年「生命のつながり：メダカのたん生」、第6学年「生き物のくらしと自然環境」など

(2) 活用方法：動植物固有の生育に適した生活環境、人間の生存活動の影響(温暖化・大気汚染・生態系の破壊)などについて、身近な河川に棲むユニークな生き物の生態を通して学習することができる。また、オヤニラミの特異な習性から、情緒的にも生物の発生や子育てについて興味深い学習ができるのではないだろうか。